

2. 基調講演

ガス分野における日ロ協力の展望

ガスプロム社副社長顧問 アレクセイ・マステパノフ

資源基盤の拡大と配置をベースとして、21世紀前半におけるガスプロムとロシアのガス分野の発展は、三つの新たなガス生産地域、すなわちヤマル半島周辺海域、バレンツ海からペチョラ海大陸棚、ロシア東部地域を中心に展開していくと思われる。これらの地域のガス生産が、エネルギー分野でのロシアの力を決定づけるものとなる。

ロシアのガス資源のうち27%以上（67兆 m^3 ）がロシア東部に集中しており、その内、52兆 m^3 は東シベリア・極東の陸上に、15兆 m^3 は東シベリア・極東の大陸棚にある。これらの資源を効果的に使用するために、2007年9月、ロシア政府はいわゆる「東方ガスプログラム」を採択した。このプログラムに沿って、四つの大きなガス生産センターを形成することになっており、2030年にはガスの生産量が1,600億 m^3 ～2,000億 m^3 となる。当初、ガス生産センターは幹線ガスパイプラインに接続され、将来的には、ロシア統一ガスパイプラインシステムを構成する。総輸出力は2030年までに、パイプラインで500億 m^3 、LNGで280億 m^3 以上になる。

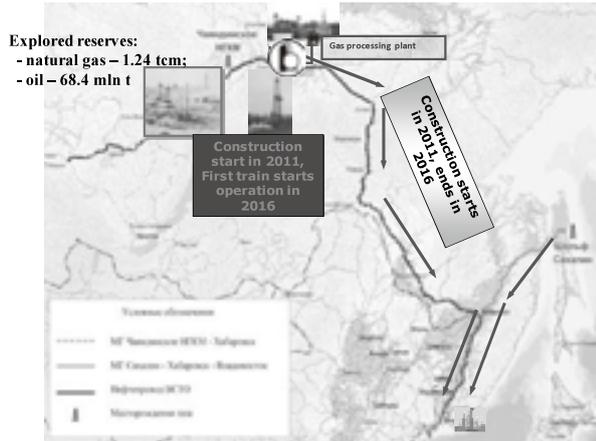
東部ロシアのガスはヘリウムを多く含み、ガス層にオイルフリンジがあるなど、組成が複雑な特徴を持つ。ロシア政府は地下資源の所有者として、これらの成分を完全に抽出し、付加価値の高い製品に処理することを望んでいる。東方ガスプログラムにおいては、ガス加工、ガス化学のコンプレックスを形成し、2030年までに年間約1,400万トン

の輸出向けの製品を生産することを予定している。

ガスプロムは、東方ガスプログラムを実施する目的で、ロシア東部地域で一連の子会社を設立した。現在、力を入れているプロジェクトとして、カムチャツカのガス供給プロジェクトがある（図2-4）。大統領の指示を受けて実施しており、第1期としてソボレボ村からベトロパプロフスク・カムチャツキーまでのパイプライン建設、クシュクスコエ・ガスコンデンセート鉱床のインフラ整備が2010年秋に始まった。またベトロパプロフスク・カムチャツキー市内にガス供給用パイプライン網を構築し、都市ガスの導入を図っている。クシュクスコエでは今年、計画生産量に達し、ニジニ・クワクチンスコエ・ガスコンデンセート鉱床でも第1期商業生産が始まった。2014年までの地質探査プログラムが策定され、西カムチャツカ大陸棚で試掘井の掘削が開始された。新たなガス田が発見されれば、将来、カムチャツカでのLNGの生産、極東連邦管区へのガス供給と輸出が可能になる。

2009年、ガスプロムが筆頭株主として参加している「サハリン2」の第2フェーズの開発が終了した。ロシア初のLNG工場が始動し、ガスプロムにとってパイロットプロジェクトとなった。現在、「サハリン3」の開発に着手し、探査掘削、三次元地震探査、海底サンプルの地質分析をキリンスキー鉱区、東オドプト鉱区、アヤシ鉱区で行っている（図2-5）。最近2年間の分析結果として、キリンスキー

図2-6 ヤクーツクガス生産センター



ス製品の輸送・販売等について共同調査を行う協定が結ばれている。

ガスプロムは東日本大震災の復興支援も行ってきた。32.5万トンの追加LNG供給を行い、必要に応じてさらに追加供給の可能性を検討する準備もある。将来的に日本への大規模な納入を考慮した場合、ウラジオストクのLNGプラントからの輸出はもっとも有望である。

ガスプロムは日本との長期的協力を重要視しており、定期的な会談が行われている。たとえばサハリン2において、オペレーターとしてはライセンスの枠内で資源基盤を充実していくべきだと考えており、日本の参加企業の考えとはやや異にしている状況がある。ガスプロムにとって重要な日本企業との協力分野としては、LNG、ガス化学、ヘリウム分離・販売、LNG・CNG海上輸送、探査などのエンジニアリング、ハイドレートの採掘・生産・輸送などがある。